

第百九十話 日本的問題解決法の失敗

日米開戦に先立ち、「対米英蘭蔣戦争終末促進に関する腹案」を決定（1941/11/15）して作戦を開始した日本軍は、初期進攻作戦が予期以上に進展し、爾後の戦争指導を如何にすべきかの検討を行った。陸・海軍の意見が対立し、一致を見なかったために、両論併記的な「今後採ルヘキ戦争指導ノ大綱」（1942(S17)/3/7）となり禍根を残した。国家の命運を決するかもしれない局面においても、和を尊び徹底的に議論して意見調整を行わない日本的な問題解決法は極めて問題であったと云えよう。

1 今後採るべき戦争指導の大綱の検討経緯

日米戦開始前に明確にしていなかった第二段作戦構想を早期に策定する必要性に迫られた大本営は、その検討に着手した。2月中旬以降陸海軍中枢課長クラスによる議論が続けられたが、意見は容易に決着しなかった。陸軍は、「既得の戦果を確保して、長期不敗の態勢を確立する。」を、海軍は、「既得の戦果を拡張して、英米の屈服を図る。」を主張した。陸軍は、自給自足態勢と不敗態勢の確立を主眼としていたが、海軍は攻撃続行による米軍との徹底的な決戦を志向していた。

議論の収束が見えぬなか大本営政府連絡会議も近づき、次のような折衷案が、佐藤賢了陸軍軍務課長から提示された。「既得の戦果を確保して、長期不敗の態勢を確立し、機を見て積極的方策を講ず。」

討議は、陸海軍軍局部長会議に諮られ、漸く3月4日に決着した。折衷案の主要部分が、次のように修正されたのである。「既得の戦果を**拡充**して」「長期不敗の態勢を**整えつつ**」

本戦争指導の大綱は、3月7日の大本営政府連絡会議に掛けられたが、噛み合わない議論があったものの、東条首相は、「いずれにしても意味が通らないではないか」と述べたが、議論を打ち切った。

2 禍根あり

陸海軍は、本構想を自分に都合の良いように解釈して、夫々の作戦を遂行していった。海軍は、5月MO作戦、6月MI及びAL作戦、7月FS作戦を追求し、ミッドウェー（MI）での大敗北となった。腹案で構想した南方資源帯確保長期不敗態勢の確立構想は吹き飛んだ。

3 日本的問題解決の弊害等

- (1) 小生の経験でもそうだが、日本の組織では、徹底的に議論して結論を得るのではなく、ある所で文言的に妥協して双方の顔を立てる。それが美德とされる。
- (2) 国家の存亡を掛けた或いは命運を決めるような局面でも同様なことが起きる。
- (3) 大本営政府連絡会議も、結局日本的な組織であったと云うべきだろう。大局観をもって断を下すべきトップリーダーを持ち得なかった日本である。陸海軍並立、統帥権独立、君主無答責であり、このような仕儀となるは必定だったのだろう。
- (4) 「腹案」で、長期持久態勢の確立方針が定まっていたのだとする陸軍に対して、海軍は、第一段南方作戦が予期以上に進展し、情勢有利な場合であり、対米決戦の好機であると主張した。非常に魅力的な考え方ではあるが、その実現可能性は果たしてあったのか？当初計画を墨守すべきか、状況に応じて柔軟に対応すべきか？
- (5) 戦争開始前に明確な疑義のない構想を確立しておくべきだったのだ。「腹案」は腹案に過ぎないとの批判もある。
- (6) 重大局面で明確な結論を導き得るシステムと人材が望まれる。

* 日本的問題解決策は、当面の問題を先送りしてしまう。先送りすればするほど、その亀裂が深くなり修復不能の状態に陥ってしまう。日本的システムの限界だ。

(第百九十話 了)